



1983年11月11日は、劇団四季が東京でミュージカル「キャッツ」を開幕した日である。浅利慶太氏はその初演の製作発表の席上、「日本の演劇公演の形態を変えてみせます」と言い切り、大変な覚悟と大きな発想をもった上演であった。

それからちょうど25周年、日本

の各地で公演を続け、今年6月には7000回を超えた。評判からみてもこれからさらに永く続くであろう。その日は劇団にとってターニングポイントになった日だが、おそらく日本の演劇界、さらに日本の文化にとっても大きな影響をもった出来事だったと思う。私はその少し前に当社の社長に

就任していた

のだが、広告

担当役員から、

劇団四季が新

宿に専用の

キャッツ・シ

アターを建設

したので、

当社にそのス

ポンサーに

ならぬかと

の話がある

と聞いてい

た。その費

用は当時の

当社の広告

費にとって

は相当な額

であった。私はミュージカル

「キャッツ」は、ニューヨーク

とロンドンで上演されている

ことは承知していたが、詳しく

は知らなかった。ちょうど

その直後、欧州へ出張する機

会があり、たまたまウィーン

の街のレコード店を覗いたと

ころ、驚いたことに店内の一

番目に付きやすいところに

「キャッツ」のカセットテープが

うず高く陳列されていた。オース

トリアでこのミュージカルの上演

はないのである。私は帰国後す

ぐにゴーサインを出した。

公演初日には中曽根康弘総理大

臣夫人もお見えになった。その日

はちょうど米国のレーガン大統領

が来日し、総理の日の出山荘で会

談が行われた当日であった。夫人

はその会場から駆けつけてこれら

たのである。

上の写真は出演者の一部とお祝

いをした時の記念写真で、下の写

真は当社がスポンサーとなった、

今まで見たこともない、ビルの狭

間に建てられたテント製の専用劇

ミュージカル 「キャッツ」 25周年

歌田勝弘
味の素特別顧問



私	の	
思	い	出
写	真	館

場である。私はマスコミから「キャッツ社長」と書かれたことを思い出した。



提供：劇団四季 撮影：山之上雅信